

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズ
プラス木場公園

「みんながいきいきしているスマートキッズ」と木場公園の「き」をイメージし、絵の具を使ってカラフルに仕上げました。

漢字を正確に書くことが難しい子どもの指導

主席研究員 河村 久

LDの子どもの困難の状態は様々ですが、今回はひらがなはほぼ読めるのに、漢字を書くことになると間違ってしまう子どもの指導について例をあげて考えてみたいと思います。

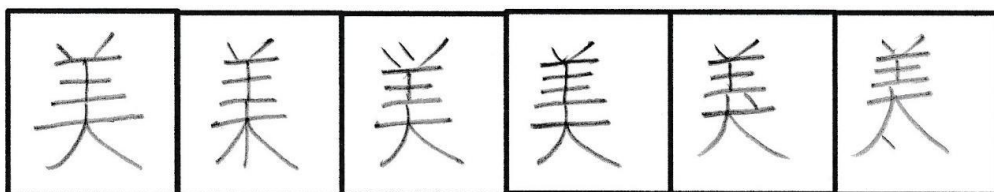
Aさんは小学校第4学年の通常の学級に在籍するお子さんです。一生懸命勉強に取り組むのですが、次のような書き間違いをしばしばします。



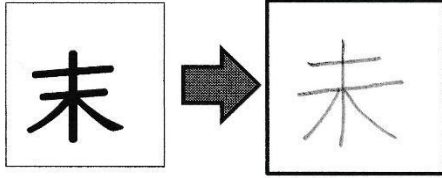
Aさんの場合、まったく異なる字を書いているわけではありませので、読みに問題はないようです。しかし、文字の形を正確にとらえることができているため、似てはいるがどこかおかしい字を書いているといえましょう。文字の読み書きに関係する音韻経路に問題はないが、視覚認知の弱さをもっていると考えられます。因みに「群」と「愛」は第4学年の新出漢字であり、「県」は第3学年配当の漢字です。前学年までに習得するはずの漢字であっても未習得の文字が他にも多数あることが想定できます。たとえば、「群」のつくりの部分共通する「羊」「洋」は第3学年で学んでいるはずで、関係づけができているのか、記憶を確認してみる必要がありそうです。

こうした子どもの指導としては、①正しい文字と間違いのある文字の違いに気付く指導、②漢字の形と要素の位置関係を言語化する指導、③既習漢字の中から関連する漢字と結びつけて記憶を確実にする指導などが考えられます。

第1の指導としては、漢字の間違い探しを行い、細かい部分を意識できるようにする指導が考えられます。例えば第3学年配当漢字の「美」を例に取れば、次のような文字列の中から正しい文字を選び、他の文字のどこが間違っているのか指摘する学習を行います。



細かい部分の違いに気付き、書き分けるといった場合、第4学年では「未」と「末」が両方出てきますので、その区別で混乱し間違えることがよくあります。上の横線と下の横線の長さで区別することを、使用例をあげながらよく理解させていくことが大切です。「物語の結末」、「未来について考える」などのように、「末」は最後を意味し、「未」はまだ始まっていない先のことを意味するといった具合にです。



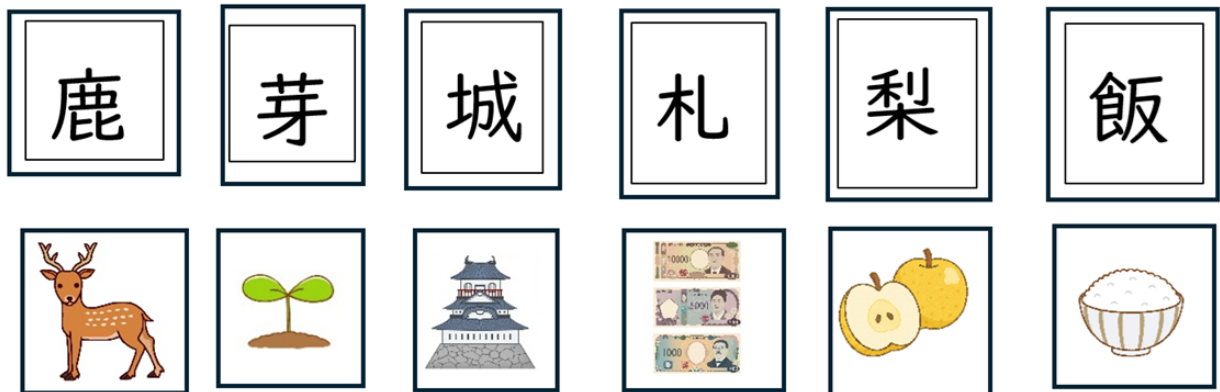
第2の指導としては、「群」なら「君(くん)」に「羊(ひつじ)」(いずれも第3学年配当漢字)と声に出して言いながら書くようにします。「愛」なら「受(じゅ)」(第3学年配当)と同じ「つめかんむり」の下に「こころ」と「すいによ」というように。「受」との違いは一番下が「又(また)」か「すいによ」(第2学年配当の「夏」と同じ)かを区別するように注意を促します。「県」の場合

も、「めを区切って小」と言いながら書くようにすると、小の縦棒が区切り線から突き出すことはなくなっていくでしょう。

第3の指導は、「群」であれば「むれ、あつまり」を意味する文字であり、「ひつじのむれ」を表しているといった漢字の成り立ちを知ることで間違いを少なくすることができます。上に記述したとおり、「羊」は前の学年で学んでいますから、その知識をここで再確認することで記憶を確実なものにすることができます。

こうした部品の組み合わせに着目して既習漢字を分類したりすることも有効な手だての一つとなりましょう。東京学芸大学の小池敏英氏らの研究グループが開発したブロック積み上げ方式の学習ソフトは通級指導教室等で活用されています。参照してみられることをお勧めします。

Aさんの場合は文字についてある程度のイメージを想起できたのですが、イメージをもつことが苦手な場合もあります。やはり小学校第4学年の通常の学級に在籍するBさんの場合です。Bさんの様子を観察すると、言葉の意味は理解しているのに漢字とのマッチングがうまくできないようです。そこで、第4学年の配当漢字の中からことばのイメージと漢字とのマッチングの指導を行うことにしました。漢字カードを見てできるだけ速く絵カードを取る、逆に絵カードを見て漢字カードを取るといったゲーム形式で行い、おおまかな字形とイメージとを結びつけるようにします。



そのうえで、漢字をパーツに分けたカードを用意し、それを組み立てる作業をとおして字形を確認していくようにします。最後に、組み立てた漢字を手元に置き、それを見ながら自分で書いてみます。これを数回繰り返していくうちに、漢字を見ただけで正しく読むことができ、細かい部分の不整形はあるものの書くことができるようになっていきました。

漢字の書字の習得をする上では、ほかにも種々の困難をもっている場合もあります。大切なことは、それぞれの子どもの困難の背景にある要因に目を向け、その要因に応じた援助の手立てを具体化していくことです。

<プロフィール>

河村 久(かわむら ひさし) 元聖徳大学 大学院教職研究科教授兼教育学部教育学科教授

私は、これまで東京都の公立学校の教員、小学校長・幼稚園長として、主として障害のある子供の教育に従事してきました。この間、全国特別支援学級設置学校長協会会長(平成19年度)、中央教育審議会専門委員(平成18年度～平成23年度)等を歴任しました。近年は、特別支援学校の学校運営のお手伝いをするとともに、通常の学級に在籍する発達障害のある子供の教育に関する研究や現職の先生方への支援にかかわることが多くなってきました。

本研究所の活動に参画することによって、生きにくさを感じている子供たちの発達支援と生活の充実のためにお役に立つことができたら、大変幸せなことと思っています。